

「けやき俳句の会」会報（第百八十七回）

平成三十一年二月六日

第百八十七回句会記録

★日時 二月六日

★場所 けやき学習室

（参加者二十三名）

★真樹先生投句

⑤ 梅一輪遺墨に流る時迅し

④ 千転の一転時空へ舞う枯葉

名のみなる雨乾坤の凍て返る

異次元の時にまねかれ鬼やらい

東風吹きて時折聴ゆ列車音

★真樹先生選句（◎は特選）

◎⑦ 降る雪は五穀の精と古老いう

◎④ 稜線の雲も寝かせて山眠る

◎② 蠟梅の香り立つ日をよき日とす

◎② 青竹の白き切口淑気満つ

◎① 山眠る地層が刻む時はるか

⑥ 春立つ日構えることもなき方便

④ 冬籠見て見ぬ振りの塵芥

③ 寒九の水析りをこめて飲み干せり

③ 時と時繋ぎて生きる八十年代

② 日向ぼこ猫と野鳥は枝の上

② 発掘の大柱あと寒月光

② 白内障の術後良好梅白し

② 限りある時を両手に春立つ日

② 調教馬のたてがみ靡く春兆す

② 南房総冬田はパステル色なるや

② 今年から年玉は無し孫成人

② 枯木立映すダム湖の水鏡

② 口元をととのへ屠蘇を酌み交す

① 相席の猫とベンチで梅見する

香魚

夢城

樹音

藍愛

秋雲

要

一華

香魚

蕉哉

藍愛

藍愛

要

一華

隼人

春草

高志

樹音

かな太

要

★会員互選句

① 春光にエンゼルフィッシュの目が赤い

① ビルの玻璃大樹を映す冬夕日

① 朝未だき雪道急ぐ道場へ

① 葉ぼたんの色はとりどりみな淋し

① 豆撒きや弾き返さる闇のなか

かな太

⑤ 皺一つ増えても息災初鏡

④ 心身の寒がり叱る水仙花

③ かき餅の干して反らせる余寒かな

③ 凍て風に古武士となりぬ樟大樹

③ 除夜の鐘障子震わす古都の宿

③ 手料理の緑あざやか春隣

② 新たなる時代に系ぐ除夜の鐘

② 初御籤共に大吉祝酒

② 河豚鍋や悪も善なる顔をして

② 蠟梅や空は青あを海は藍

② 薄藍の空円やかに春立つ日

② 皮だけの実に入日灯りけり

② 畏まり巫女の所作まね破魔矢享く

② 山深きカフェの裏庭藪柑子

② 安房なれや暖翠見ゆる春立つ日

要

秋雲

夕佳

樹音

かな太

東洋

隼人

史烙

夕佳

一華

藍愛

真弓

真弓

冬水

冬水

夕佳

春草

一華

樹音

清明

【次回開催】

★日時・平成三十一年三月六日（水）

★場所・けやき学習室

★提出句・兼題「真」を含め三句提出